2012 年度　立命館学校教育研究会　総会・分科会の報告

総会の様子

総会の様子

第1分科会の様子

第2分科会の様子

第3分科会の様子

懇親会の様子

★立命館学校教育研究会総会・分科会★

　2012 年 12 月 2 日（日）に、100 名を超える校友教員、学生、教育関係の方々にご参加頂き、2012 年度立命館学校教育研究会総会・分科会・懇親会を開催致しました。今回は、当日の模様をお伝え致します。

★立命館学校教育研究会総会★

12 月 2 日（日）13 時 15 分から 13 時 45 分まで、衣笠キャンパス清心館 3 階 534 号教室にて開会されました。

崎野会長の開会挨拶の後、大学を代表して米山教学部長から教職課程の現状も含めてご報告をいただきました。

2012 年度活動報告ののち、会の「申し合わせ」について改正提案がなされ、①本会の目的を明記、②顧問と事務局長の役職の新設、③運営委員数の上限の設定などが承認されました。

また、次期運営委員会体制について提案があり、大学として責任をもって運営を行うため、教職教育推進機構長が、当面の間、会長職につくこと、担当の教学部副部長が事務局長の役を担う等を含め、新たな体制について承認されました。

あらたに会長となった米山教授より、崎野隆前会長の本会顧問への就任について提案があり、会場からは、本会発足時より長年にわたりご苦労をいただいた前会長へ感謝の意味をこめての盛大な拍手とともに、顧問への就任が承認されました。

ひきつづき、2013 年度の活動方針について、①総会の時期の変更および名称の変更、②情報発信のあり方の検討、③若手教員懇談会の実施方針などについて提案があり、承認されました。

★立命館学校教育研究会　分科会★

12 月 2 日(日)総会に引き続き、分科会が開催されました。3 つの分科会ではいずれも時間が足りなくなるほど熱心な講義や討論が行われました。

<<第 1 分科会記録>>

報告「ソーシャルメディアの最前線」

京都外国語大学マルチメディア教育研究センター准教授　村上　正行　氏

司会：神藤　貴昭
出席者数：35 名

第一分科会では「ソーシャルメディアの最前線」と題して，京都外国語大学マルチメディア教育研究センター准教授の村上正行先生にご講演いただき，約 30 名の参会者が熱心に村上先生のお話に耳を傾けました。

講演では，近年，普及が著しい Facebook，twitter，LINE などのサービスについて，それぞれの特長

や，利用に伴う問題点について，具体的な実例を挙げながらお話されました。そして，教育との関わりでは，「ネットいじめ」とそれらのサービスとの関係性についても言及されました。「仲間はずれ」や「悪口・軽視」など，それ自体はこれまでのいじめのあり方と本質的に相違があるわけではないが，ネットいじめの場合，それが 24 時間継続し，子ども達にとって逃げ場が確保されにくいという特徴が見られると指摘され，教師のみならず，家庭と連携した対応がこれまでのいじめ以上に必要であると述べられました。また，大人たち（教師や親）の対応として，「新しいことに拒絶反応を示さないように」「自分は理解できなくても，子どもが利用することを理解する」「可能であれば，そのサービスを体験してみる」などのご示唆をいただきました。

講演後の質疑応答では，ソーシャルメディアサービスについての個別的な質問をはじめ，それらと子ども達との関わりについては，思春期葛藤との親和性の高さ，彼らの「居場所」としての役割，といった視点から捉えていくことが大事であり，そのような視点を踏まえた上で教師や親は対応していくべきではないか，といった意見も出され，熱心な意見交換が行われました。

（文責:運営委員　角田将士）

<<第 2 分科会　記録>>

報告「盲学校から見た特別支援教育の現状と課題」－神戸の盲学校から－

報告者：神戸市立大池中学校教頭　増田　和幸 氏

司会：岡本真一
出席者数：21 名

第二分科会では、神戸市立大池中学校教頭の増田和幸先生から、「盲学校から見た特別支援教育の現状と課題」と題して、ご自身の経験にもとづくご報告をいただきました。

増田先生からはまず、盲学校に赴任してはじめて出会ったことばとして「白杖、あはき（三療）、六つ星、晴眼、点字・墨字、拡大読書器」を挙げ、点字で記載された報告要旨の表紙を用いて、点字や道具を使いこなすことが身につけてほしいことのひとつだとの話をされました。その上で、盲学校が少数で日常的な交流も困難である上に生徒数減により、学校維持そのものも課題となっていると指摘されました。

次に、盲学校での教育活動について説明され、次の５点を盲学校教育の課題として挙げられました。①教員の専門性の維持・向上。②特別支援学校の免許状を持っている教員が約８割、視覚支援・自立教科だけだと約５割であること。③児童生徒の重度・重複化、点字指導の機会が減少。④研修体制の充実、現状

は校内研修、近畿ブロックでの研究会のみ。⑤他の障がい種別の学校との統合可能性。

地域の学校（一般校）には、①見えにくいためにできない児童生徒の発見が必要と指摘され、②当該生徒のケアについては盲学校に相談することの有効性を述べた上で、見えにくい生徒への配慮は、他の生徒への配慮になる点を強調されました。最後に、盲学校に勤務して特別支援と言う言葉の意味は「特別に支援して伸びる」ということだということを実感した旨述べて報告をおえられました。

以上の報告をうけて、司会者が①見えにくい生徒への配慮の意義はすべての学校に通用すること②インクルーシブ教育は、統廃合が進むなかで障がいのある生徒に負担がかかっていく現実があること、の２点を確認し、フリートーキング形式で意見を交換しました。

その中で、とくに意見が集中したのは①支援学校と一般校との教員交流と研修。②一般校における特別な支援の必要な生徒への教育。③視覚支援学校の生徒減と知的及び肢体面を対象とする支援学校生の増加との対照。④進路の課題等をめぐる問題でした。

意見交換を通じて、「どこの場所でも通用することが浮かび上がってきた（司会者まとめ）」ことが収穫でした。

（文責:運営委員　大島　明）

<<第３分科会記録>>

「もっと語れる人に」～発問次第で語る力を鍛えることができる～

日本福祉大学開発学部　准教授　中西　哲彦　氏

司会：文田明良
出席者数：44 名

講師の中西哲彦氏の紹介の後、講演がスタートしました。最初に所属校種アンケート（挙手）で、様々な分野から"コミュニケーション力"に興味をもった先生方が集ったことがわかり、改めてその大切さを実感しました。

講座はワークショップを交え、同じテーブルについた者同士が意見を交わしあう"聴衆参加型"。実際に発問があり、それに対して参加者が考え、体験する時間が多くとられたので有意義な時間となりました。

まず「コミュニケーション」とはどういうことかを考えるために、用意された質問に対して、２通りの答えが提示されました。１つめは Yes、No または"単語"で完結する答え、もう一方は本人の思いなどを加えたより具体的な言葉を添えた答えです。もちろん後者が圧倒的に支持を集めますが、それではどこがよいのかをつきつめていきます。参加者からは「具体的な内容で答えた人のパーソナリティ（人となり）がわかる」、「たくさんの情報が得られる」などの解答がでて、そうすると"話者に親しみが湧く"という

ところに行き着いきました。それはコミュニケーションを理解するのにとても重要な視点で、人は他人とつながるときにその人が"自分に対して敵意がない"ことを確認したい、異質なものとは交流したくないという思いがあります。たくさん話して多くの情報を得ると、いろんなことを共有できます。共有を積み重ねた安心感・信頼が、つながりの強化には不可欠であるということがわかりました。

ほかにもワークショップでは予期せぬ質問・反応にどう対応するかも体験しました。相手と自分の捉え方の違いを察知してきちんと説明する能力が問われます。単純な文章の音読ひとつでも、わかりやすく伝えようという気持ち・聞く相手への気遣いが基本的なコミュニケーションの姿勢となってあらわれることが実感できました。

またコミュニケーション能力の向上の説明で、英語の Can-do リストが参考として示されました。高度になればなるほど、答えには問いに対する広がりと深みが要求されます。そしてそれは全ての教科や分野に関係するのではないだろうかと中西氏は述べられました。例えとして挙がった、外国との商談という形でもそのことは証明されたように思います。ピンチに立たされたとき、たじろがずに切りこむ力、まさに予期せぬ問いに対応する力が必要だと痛感させられました。

では、そのような力を身につけるために、中西氏は英語学習指導要領の"受信から発信へ"という部分が大切だと話されました。①概要を捉え、②事実を把握する。そして③自分の言葉で伝える(発信)ことができれば、力はついてきます。発信するときはもちろん冒頭で学んだコミュニケーションスキルを生かして"相手を思いやりわかりやすく、言葉を尽くして"が重要です。

そこで、生徒が自分の力で発信できるように発問を考えるのが教師の役目となります。内容をまとめて再構築して発信、語り直す（Retelling）を繰り返して練習するということで、実際にいくつかの文章で体験してみました。一度黙読する→文章を隠す→人に語るという手順で何度か行うと、たくさん語ることに慣れてきます。問題を内在化させるための質問例を見て、参加者が発問も考えました。中西氏は大きく記憶を揺さぶり、内容についてダイナミックな再構築ができるものが望ましいと答えておられました。

また、小学生に授業をする場合などには、関連した絵を並べるなどして、取り込んだ内容を語る手助けをする手法も紹介されました。

ワークショップはどのテーブルも盛り上がり、参加者からは「分科会にこのような形式を是非取り入れてほしい」という声が聞かれました。

（文責：運営委員　山本佳苗）

★2012 年度　立命館学校教育研究会　活動報告

4 月 22 日　　第 1 回運営委員会　（出席：13 名）

1. 2012 年度立命館学校教育研究会年間行事予定担当体制確定
2. 6 月開催の講演会について

5 月　　メールマガジン発行①

6 月 22 日　第 2 回運営委員会　（出席：16 名）
若手懇談会について
6 月 24 日　講演会「ネットいじめはなぜ痛いのか」佛教大学教育学部教授(教育学部長)
原清治氏　　（参加 63 人）
懇親会　(参加 27 人)

8 月 4 日　　第 3 回運営委員会　(出席：14 名)
1.若手懇談会の運営について
2.申合せの改正について
8 月 4 日　　若手教員懇談会
「悩みを抱えつつもゆとりと充実のある教師生活を送るために―笑顔で過ごせるような教師を目指して―」
分科会 1（小学校　　：　6 名）
分科会 2（中学・高校　：10 名）
8 月　　メールマガジン発行②

12 月 2 日　　第 4 回運営委員会
12 月 2 日　　2012 年度総会・分科会（出席：107 名）
分科会 1：「ソーシャルメディアの最前線」　京都外国語大学　村上正行氏
分科会 2：「盲学校から見た特別支援教育の現状と課題」
神戸市立大池中学校　増田和幸氏
分科会 3：「もっと語れる人に」～発問次第で語る力を鍛えることができる～
日本福祉大学国際福祉開発学部　中西哲彦氏
【後援】2013 年度採用　教員採用試験合格者激励会（教職教育推進機構主催）
メールマガジン発行③

2 月　　メールマガジン発行④